プロローグ

誰もいないかと思ったオフィスには、社長の落合洋子がすでに出社していた。彼女が毎日連れてくる白猫が、来栖のデスクの上で丸くなっている。

「社長、早いじゃないですか」

オフィスの一番奥、広々としたデスクで悠々とコーヒーを飲んでいた洋子は「そっちこそ」と笑った。彼女が羽織った桜色のストールに、もうとっくに三月だったなと思い至る。

「今日面談に来るうちの姪っ子のこと、よろしくね」

「姪っ子さんだろうと誰だろうと、いつも通り対応するだけですよ」

「あんまりいじめないでよね。やっと転職活動できるまで元気になったんだから」

デスクにいた白猫を抱き上げ、オフィスの窓から外を眺めた。春の薄い曇天からは今にも雨が降り出しそうだった。

西新宿の街を、各々（おのおの）の職場に向かう大勢の人が蠢（うごめ）くようにして歩いている。ビルの十二階から見える通行人の姿はとても小さいが、三月に入って日に日に寒さが緩（ゆる）んでいくのが、人の服装や歩き方からよくわかった。

「こら、魔王、聞いてるのか」

洋子から飛んできた不本意なあだ名に、「その呼び方、やめてください」と抗議して、デスクに戻った。昨日（きのう）までに何度も確認したスケジュール帳を改めて開く。

十一時に、洋子の姪の名前が書いてある。

「……まったく、どうしてこんなことになったんだよ」

第一話

そんなこと自分で決めてください

二十六歳／女性／広告代理店 営業職 退職

未谷千晴

三月になったのに、傘の隙間から入り込む雨は紙やすりみたいに冷たく鋭かった。眼鏡のレンズに、雨粒が一つ落ちる。未谷千晴は傘の柄を持ち直した。

今月から大学生の採用活動が解禁されたせいか、新宿駅からの道のりにはスーツ姿の就活生が目立った。多分、この西新宿のビル群の至るところで会社説明会が行われているのだろう。

四年前の千晴もそうだった。社会人になったら使い物にならない真っ黒なリクルートスーツを着て、収納力のないリクルートバッグを手に、東京中を駆け回った。今、頑張れば、きっと幸福な社会人生活が待っている。そう思っていた。

まさか、社会人になって、たった三年で転職活動をすることになるなんて。

目的のビルの前で足を止め、千晴はゆっくり深呼吸をした。家族でも友人でもない人とまともに話すのは、三週間ぶりだ。体が他人に会う態勢になっていない。

でも、このまま寒さが緩んで、桜が咲いて……季節の移り変わりに乗り遅れたら、二度と復帰できない気がする。普通に働いて普通にお金を稼ぐ普通の大人に、戻れなくなる。

すぐ側を、リクルートスーツのグループが通りすぎていった。男子は爽やかな短髪で、女子はぴしっとしたポニーテール。寒さに負けない凛々しいうなじを横目に、千晴は意を決してビルに足を踏み入れた。

広々とした、天井の高いホール。エレベーターが六基あって、そのうちの一つがちょうど一階に下りてきた。

エレベーターで十二階に上がる。エントランスは明るかった。外が悪天候で薄暗かったせいで、一瞬、目がチカチカとした。

〈シェパード・キャリア〉

エントランスに掲げられた看板に、白い照明が当たっていた。羊飼いが使うフックという道具をあしらったロゴマークに、不思議と目が吸い寄せられる。

ガラス製のドアを開けると、無人の受付があった。電話が置かれていて、来客用の呼び出し番号が案内板に貼ってある。

オフィス独特の、おろしたてのジャケットのような澄んだ香りがした。洒落たデザインの本棚に仕切られてよく見えないが、その奥から人の気配がする。静かだけれど、どこか熱っぽい。仕事をしている人間の息遣いだ。

受話器に手をやった瞬間、「ちーはーるー！」と黄色い声が飛んできた。

「千晴のことだから、約束の五分前に来ると思った」

春を先取りしたような桜色のストールを羽織った落合洋子が、本棚の奥から現れる。緩くウェーブした髪を揺らす姿は、相変わらず五十二歳に見えない。

彼女は千晴の叔母にあたり、シェパード・キャリアは洋子が社長を務める人材紹介会社、いわゆる転職エージェントだ。東京に本社が、大阪と福岡にも小さいながら支社がある。全従業員数は六十人。これでも二十年以上の歴史がある。

去年の年末から休職し、先月ついに会社を辞めた千晴に「次の職場はうちを使って探したら？」と言ってくれたのは、洋子だった。

「可愛い姪っ子には優秀なキャリアアドバイザー（ＣＡ）を担当につけておいたから」

ひらりとストールをはためかせた洋子に、面談ブースへ案内された。広々とした空間に椅子とテーブルが置かれ、パーティションでブースごとに区切られている。青を基調とした内装は閉塞感がない。

「ＣＡは、転職活動を二人三脚でサポートしてくれるパートナーみたいなものだから、言いたいことは遠慮なく言いなさいね」

平日の昼前だからか、面談ブースには千晴以外の求職者はいない。案内された窓際の席に腰掛けると、洋子は「それじゃあ頑張ってね」とストールを翻した。

「ねえ、洋子叔母さん」

慌てて振り返って、千晴は洋子を見上げた。
「ありがとね。転職活動、頑張ります」
千晴が休職してから、洋子は何かと世話を焼いてくれた。家に籠もっていた千晴を食事や買い物に連れ出してくれて、こうして仕事を探すきっかけもくれた。
「大丈夫、大丈夫、うちのCAがばっちり見つけてくれるから。大船に乗ったつもりでいなさい。なにせあいつのあだ名、〈転職の魔王様〉だから」
どん、と自分の胸を拳で叩いた洋子に、千晴は首を傾げた。
「……魔王様？」
「魔王様」
明らかに含みのある笑みを浮かべた洋子は、「あんた、コンタクトより眼鏡の方がしっくりくるね」と千晴の顔を指さして、面談ブースを出て行ってしまった。
細身のパンツを穿いた洋子の背中が遠ざかり、代わりに木目調の床を靴の踵が鳴らす音が近づいてくる。その足音に紛れて、カツン、カツン、とリズミカルで軽やかな、でも乾いた音が、やって来る。足音と戯れて踊っているみたいだ。
現れたのは男だった。磨き上げられた革靴も鮮やかな紺色のスーツも、臙脂色のネクタイも金色のネクタイピンも妙に存在感があったが、何より印象的だったのは男の右手だった。

男は杖をついていた。
「あなたが未谷さんですか」
名前を呼ばれ、すぐさま席を立った。若い男だった。千晴より少しだけ年上だろうか。ピンと伸びた背筋に、涼やかな凛とした目をしていた。
だからこそ、右手に持った木製の杖がとても異質なものに見えた。
「足の不自由な人が珍しいですか？」
頭の中を、さらりと読まれてしまう。怒っているわけでも悲しんでいるわけでもない、とてもひんやりとした声色だった。
「すみません、そういうわけでは……」
「初めて会った方は、僕の顔を見るより先に杖を見るので、別に構いませんよ」
カツン、と乾いた音が鳴る。天然石のような綺麗な模様をした杖の持ち手が、照明を反射して生き物みたいにぬるりと光った。やや遅れて、彼の左足が杖を追いかけるようにぎこちなく動く。
「社長の落合から『うちの姪っ子を頼む』と言われました。ＣＡの来栖です」
来栖嵐と、差し出された名刺には書いてあった。名前の横に顔写真が入っている。実物と寸分違わない、ひやりと冷めた目をしていた。
タイミングを見計らったように風が強まって、雨が面談ブースの窓に打ちつけ

る。雨風を背に、来栖は千晴に座るよう促した。

「未谷千晴さん。前職は広告代理店で、新卒で一之宮企画に入られたんですね。営業企画部でおよそ三年勤務。昨年末から休職し、先月退社」

席に着いた来栖の手元には、真っ黒なファイルがある。千晴がシェパード・キャリアに登録したときに送った履歴書と職務経歴書が挟んであった。

「一之宮企画といったら、業界最大手ですね。就活も激戦だったでしょう？」

「確かに競争率は高かったですが、運よく採用していただけました」

まるで用意された原稿を読み上げるような、ぎこちない返事になってしまった。そんなことは意に介さない様子で、来栖は話を続ける。

「入社後は営業企画部に配属されて、クライアントへの広告の提案、進行管理、制作のディレクションをしていたと。退職の理由は激務のための体調不良だと落合から聞きましたが、天下の一之宮企画も大変みたいですね」

広告業界は大手だろうと中小企業だろうと、激務に変わりない。営業と名のつく部署は尚更だ。一之宮企画は大手の広告代理店だが、有給休暇の取得率は低かったし、反比例するように残業時間は長い。法令遵守の意識も低かった。

その後も来栖は、千晴の履歴書をなぞる形で事実確認をしていった。千晴はただ首を縦に振り続けた。

「希望業界や職種の欄に何も記入されてませんでしたが、次の職場に対する希望はないんですか？」

履歴書から顔を上げた来栖が聞いてくる。睨んでいるわけではないのに、槍のような視線をした人だ。

「前の会社を三年もたず退職してますし、高望みをするつもりはないです」

両膝に置いた手を、無意識に握り込んでいた。高望み――新卒で入った会社を三年たたずに辞めてしまった自分にとって、どこまでが高望みで、どこまでが身分相応なのだろう。

トレイに紙コップをのせた女性がやって来て、「どうぞ」とホットコーヒーを千晴と来栖の前に置く。随分と若い人だった。大学生のアルバイトかもしれない。社長の姪だと聞いているのだろうか、千晴の顔をまじまじと見て、「失礼します」とにっこり笑って去っていった。

「高望みですか」

来栖は微かに眉を寄せた。浅い皺から不快感が伝わってくる。

「はい……それに、このまま無職期間が長くなるのは致命的だと思っていて」

「仕事内容なんて何でもいいから、とにかく履歴書の空白期間を埋めたい。それが未谷さんのご希望ですか」

咄嗟に返事ができなかった。無職期間を――働かずに親の脛を囓っている時間を減らすことが、転職の目的なんだろうか。仕事とはもっと、輝かしくて熱量があって、心を弾ませるものなのだと思っていたのに。

コーヒーを口に含む。眼鏡のレンズが白く曇る。熱々のコーヒーを飲み下すと、背に腹は代えられないじゃないか、と耳の奥で声がした。

「はい。どんな業界でもどんな会社でもいいので、とにかくちゃんと働きたいです。同級生はみんな働いてるのに、働きもせず家にお金も入れず、税金も年金も親に払ってもらってるとか、本当、駄目な大人じゃないですか」

このまま仕事をしていない時間が半年、一年……と経過してしまったら、同世代の人達と時間がどんどんずれていく。

それを耐えられる人もいるのかもしれない。強い人。自分に自信がある人。でも、私は耐えられない。

「そうですか」

来栖の反応は淡泊そのものだった。普段からこんな態度なのだろうか。それとも、千晴が社長の姪だから、適当に対応しているのか。

「未谷さんのご希望はわかりました」

来栖がファイルを閉じる。舞台の幕が上がったように、彼は朗々と語り出した。

「未経験業界に行けるのは二十五歳まで、三十五歳が転職限界年齢なんて言われています。ちなみに、女性の場合は三十歳が転職限界年齢だと言う人もいます。それから、転職エージェントの顧客は求人を出している企業です。僕達ＣＡの給料は、求人企業から支払われる紹介料で賄われます。ということは、企業の顔色を窺って未谷さんに求人を紹介する可能性もあります。例えば『この求職者の希望とは合致しないけれど、企業が人材を欲しがっているからねじ込んでしまえ』とか、『この人の経歴では希望する企業には絶対受からないから、適当な会社を紹介して押し込んでしまおう』とか」

横っ面を叩かれたような気分になって、千晴は数秒間呆けてしまった。言われたことを頭の中で反芻すると、自然と反論が漏れてしまう。

「あの、そんな話を私にしてしまっていいんですか？　男女の転職限界年齢とか、どう考えたって性差別だし」

「僕も男女で転職限界年齢に差があるのはおかしいと思います。終身雇用制度がすっかり崩壊してる社会で転職限界年齢なんて言葉が存在すること自体、そもそもおかしいんですよ」

彼はくすりとも笑わない。テーブルの端に立てかけられた杖の、天然石のような持ち手が、こちらを睨みつけている。

「転職限界年齢は、ネットで転職について調べたらすぐに出てくる話です。悪徳転職エージェントの話だっていくらでも転がってます。あとから知って不安になるより、先に僕から言われた方がいいでしょう？　僕は、求職者が男性だろうと女性だろうと、何歳だろうと、前職が何だろうと、最初にこの話をします。転職の第一歩は、己（おのれ）と、己の置かれた状況を知ることから始まりますから」

お前が社長の姪だろうと関係ない。そんな顔で来栖は笑った。枯れ葉が枝から落ちるみたいに、素っ気（け）なく。

「未谷さんは前職も大手でしたし、年齢的にもマッチする求人企業は多いはずです。後日、紹介企業のメールをお送りしますので、じっくり吟味（ぎんみ）してください」

来栖の手が杖に伸びる。カツンと杖先を鳴らして立ち上がると、薄く微笑（ほほえ）んだまま千晴を見下ろす。

「では、面談はこれで。社長が、面談が終わったらあなたとランチに行きたいと言っていたので、呼んできますね」

千晴の話をひとしきり聞いた洋子は、分厚い豚（とん）カツにかぶりついて高笑いした。

「ね、言ったでしょ。魔王様だって」

熱いうちに食べなよ、と促され、千晴は肩を落としながら豚カツを嚙った。

シェパード・キャリアから歩いて五分の豚カツ屋に、洋子は連れて来てくれた。人気店のようで、千晴達が入店した直後に外に行列ができ始めた。

「うん、よくわかった。王様じゃなくて魔王様という理由もわかった。よーく、わかった。あれは確かに、王と言うより魔王……」

「でしょー？」

「正直、あの人がCAやってるの信じられないっていうか……なんでこの仕事してるんだろうっていうか……」

「転職する気、なくなっちゃった？」

こうなることを見越していたのか、洋子は楽しそうに千晴を指さした。

「ホントだよぉ。魔王様ってそういうこと？　求職者の心をへし折る魔王様？」

「大丈夫、へし折っても内定させるのがあの男だから。企業からは『来栖さんが紹介する人材は間違いがない』って評判だし、求職者からは『最初は殺してやろうかと思ったけど、いい転職ができたから見逃す』ってよく言われてるよ」

「どんなに有能な人でも、まともな人は『殺してやろうかと思った』なんて言われないと思うんだけど」

「叔母さんの人を見る目を信じなさい。元はバリバリの商社マンだったのを私が捕まえたんだから」

冷めるよ、と洋子が千晴の皿を指さす。洋子の豚カツは綺麗になくなっていて、千晴は慌てて残りのカツを頬張った。サクッという衣の音が、とても虚しい。

黙って豚カツを咀嚼する千晴を、洋子は温かいお茶を飲みながら眺めていた。豚カツも付け合わせのキャベツも平らげたところで、おもむろに話し出す。

「次はきっと、いい職場だよ」

しみじみと噛み締めるように、言った。

「え？」

「世の中、前の職場みたいな悪いところばっかりじゃないよ。いい会社だっていっぱいあるから。きっと来栖がそういう会社を紹介してくれる」

大学受験のとき、就活のとき、千晴が一番頼りにしたのが洋子だった。その洋子が来栖に任せろと言うなら彼を信じたい――のは山々なのに、くすりとも笑わないあの顔を思い出したら、途端にその気が失せてしまう。

――高望みをするつもりはない。

千晴がそう言ったときの来栖の顔が、ふと蘇る。新卒で入った会社で三年も耐えられなかったのに、「いい会社に行きたい」「高い給料がほしい」「やり甲斐がほしい」「プライベートも充実させたい」なんて言うつもりはないし、言われたって彼も困るだろうに。まさか眉間に皺を寄せられるとは思わなかった。

「うちの会社、シェパード・キャリアだよ？　で、あんたの苗字は未谷でしょ。きっと、羊飼いが迷える羊を未来に導いてくれるよ」

羊飼いが使うフックを、杖のように扱う来栖の姿を想像した。魔王と異名を取る彼に羊がころころと誘導され、羊小屋に収容されていく。羊達はそのままジンギスカン用の肉になって出荷される。

「……頑張ってみる」

あ、さっきは「頑張ります」と言ったのに。言い直そうとしたら、洋子は「そうねー、頑張りなさい」と笑って、店員に温かいお茶のお代わりを頼んだ。

会社に戻る洋子と別れ、せっかく新宿に来たのだから買い物でもして帰ろうかと思ったが、どこに行こうか考えているうちに真っ直ぐ駅の改札を通過していた。

電車に揺られながら、スマホで転職エージェントについて調べた。来栖の言う通り、転職限界年齢や、男女でそれに差があるらしいと書かれていた。

早く内定が出ないとエージェントが投げやりになり、自分の成績を上げるために条件のよくない求人を紹介してくるようになるとか。エージェントを利用してやろうというくらいの心意気がないと、希望通りの会社に行けないとか。

しかし、あの男を利用してやるのは、無理な気がした。

◇　◇　◇

「宣伝部？　あんた、また広告の仕事するのぉ？」
途端にしかめっ面半分、泣き顔半分になった母に、鶏もも肉に包丁を入れながら千晴は「違う、違う」と首を横に振った。
「広告を作る会社じゃなくて、アパレルの会社の宣伝部門。会社の製品のＰＲをする部署だよ」
母が最近はまっているハーブソルトを鶏もも肉にまぶしながら、千晴は第一志望の企業について懇切丁寧（こんせつていねい）に説明した。隣で筍（たけのこ）の煮付けを作りながら、母は不安そうな様子でそれを聞いていた。
シェパード・キャリアでの面談のあと、来栖嵐はすぐにメールで求人を送ってきた。対面したときとは違いメールはとても丁寧で、文面からあの魔王様の顔は想像できなかった。
彼が一番に勧めた求人は、大手アパレルメーカーの宣伝部だった。
「ジーヴス・デザインって、お母さんも知ってるでしょ？」
母は結婚前、百貨店のアパレルコーナーで働いていた。今も近所のショッピングモールにある衣料品店でパートをしている。

「あ、知ってる、ジーヴス。最近若い子向けのブランドも始めたでしょ？」
「そうそう、そのジーヴス」
数年前に立ち上げた若者向けファッションブランドに力を入れるため、宣伝部に若い女性をほしがっている。広告業界経験者だと嬉しい。求人に書かれていない裏事情も、メールにはしっかり書いてあった。
「女性が多い会社で、子育てしながら働いてる人も多いんだって。お給料も前とそんなに変わらないし、勤務地も赤坂だから家から通えるし」
「あら、それはいいわ。そこに決めちゃいなさい」
「決めちゃいなさい、って、受かるとは限らないからね？」
条件のいい会社には、応募者も多い。そういう場合は転職エージェントの社内で選考が行われることもある。来栖はそれすら見込んだ様子で、「未谷さんの経歴なら、社内選考は通りますよ」なんてメールをよこした。
「そんないいところなら、お父さんも反対しないんじゃないかな」
機嫌よく鍋に蓋をした母がスマホを確認する。「お父さん、駅に着いたって」という声を合図に、千晴は油を引いたフライパンに鶏もも肉を並べた。鶏皮がじゅう、と鳴る。父が帰ってきたら、ジーヴス・デザインに応募することを伝えよう。
千晴が一之宮企画に内定したとき、両親は喜んでくれた。娘が大手広告代理店に

勤めることになって鼻高々だった。

入社した途端に終電帰りと土日勤務が当たり前になって、母が「そんなに働かなきゃいけないの？」と心配し始め、「新人なんてそんなもんだ」と言っていた父が「ちょっとおかしくないか？」と眉を顰（ひそ）めるようになったのは二年後だった。

「あんたが再就職したら、お料理手伝ってくれる人がいなくなっちゃうのねー。この二ヶ月、楽だったのに」

なんて言うけれど、一人娘がいつまで無職でいるか、父も母も気が気じゃなかったはずだ。千晴が高校生の頃から「大学を選ぶときは就職率をちゃんとチェックしなさい」と、入学したらしたで「一年生のうちから就職のために動かないと」と口（くち）酸（す）っぱく言っていた二人だから。

「最初は味付けがめちゃくちゃだったから、骨が折れたけどさあ。うちの子、こんなに家事能力低かったかしら、って」

「さすがに二ヶ月も手伝ってたら、味付けくらい覚えたよ」

数分後に予告通り帰宅した父と夕食を食べながら、転職活動の話をした。アパレルメーカーの宣伝部を受けると言うと、父は「いいじゃないか」と笑った。「次はホワイト企業だといいな」と続けて、母に睨まれて首をすくめた。

夕飯の片付けを手伝って、風呂に入って、自室でジーヴス・デザインに提出する

職務経歴書をノートPCで作った。来栖が送ってくれたテンプレートに沿う形で、一之宮企画での実績や自分のアピールポイントをまとめていく。

〈広告代理店で企業を外部からプロデュースしてきた経験は、宣伝部の即戦力として活きます。謙遜せずにアピールしてください。未谷さんの経歴は先方にとって魅力的に映っているはずなので、そこを突いていきましょう〉

来栖からのメールにはそんなアドバイスが書いてあった。若者向けのブランドに注力したい相手の事情を踏まえ、若者がターゲットのプロジェクトに携わった実績を前面に押し出した職務経歴書にした。

高校生に人気のアイドルを起用して作った、スナック菓子のテレビCM。

ロングセラーのスポーツドリンクを若者向けにリニューアルしたプロジェクト。

スーツメーカーとコスメブランドがコラボした女子大生向けの就活イベント。

渋谷に昨年末にできた商業施設のブランディングチームに加わっていたことは、書いた方がいいだろうか。でも、その最中に体調を崩して最後までやりきれなかったし、マイナスイメージを与えてしまうかもしれない。

キーボードに置いていた自分の掌が、汗でべっとり濡れていた。なのに指先が冷たい。暖房をつけていて部屋は暖かいのに、手足の末端が冷たい。

台所でゆず茶を淹れた。蜂蜜をたっぷり入れて、部屋に戻る。手は冷たいままだ

った。ゆず茶を飲んでも飲んでも、なかなか温まらない。
台所に行っている間に、スマホにメッセージが届いていた。一之宮企画の同期の子からだった。休職してからもちょくちょく連絡をくれていたのだが、この一ヶ月は特にやり取りもなかったのに。
メッセージを確認して、千晴は小さく息を呑んだ。
〈四月から営業企画部に異動だってさ。しかも第一だよ〉
第一営業企画部は、千晴がいた部署だ。もう三月だし、四月からの異動の辞令が出てもおかしくない時期ではある。
〈たぶん、千晴の穴を埋めるためってことなんだろうけど、異動前なのにもう仕事割り振られてる。初っ端から容赦ないねー〉
新人研修の頃、千晴も彼女も営業企画部を希望していた。でも配属されたのは千晴だけで、彼女はデジタルマーケティング部に行った。
千晴が退職したことで、彼女にはチャンスが巡ってきたのだろう。
〈私の尻ぬぐいさせられる感じになったらごめん。大きなプロジェクトが動いてたから、結構しんどいことになってるかも〉
竹原部長には気をつけて。続けてそう打とうとして、余計なお世話だろうかと指が止まる。私ができなかっただけで、彼女は上手くやれるかもしれない。異動前に

嫌な先入観を与えるのは、ものすごく嫌味かもしれない。
迷っているうちに、向こうから返事が来てしまった。
〈とりあえず頑張ってみる。何かあったら相談のって。またご飯行こう〉
スタンプが送られてくる。千晴もスタンプを送り返した。ぽこん、ぽこん、と軽やかな音がスマホから響く。
ああ、まずいなあ。今夜、ちゃんと寝られるかな。そう思いながら布団に入った。やばいやばいやばい、どうしようどうしよう。頭はどんどん冴え、休職直前のことが数珠つなぎに思い出され、千晴を引き摺り回す。

営業企画部は花形部署だ。クライアントに広告を提案し、プロジェクトの進行を管理する。一之宮企画の要の部署だと会社説明会でも聞いた。多忙な部署だが、そのぶんやり甲斐もあると。
竹原という五十代の男は、特に激務で有名な第一営業企画部の部長だった。
あの年、千晴と一緒に第一営業企画部に配属されたのは五人だった。配属初日の千晴達に、竹原は「お前等は今日から兵隊になるんだ」と言った。今から殴り合いでも始まるんじゃないかという顔で、新入社員に檄を飛ばした。
「新人なんてみんな足手まといなんだ。死に物狂いで働け。二十四時間働け。一度

取り組んだ仕事は死んでも放すな、殺されても放すな」

恐ろしい話をされていると思った。でも不思議なもので、新人研修を終えたばかりの千晴にはそれが、自分達を鼓舞する感動的な演説に聞こえた。

「さっさと足手まといを脱し、会社から必要とされる人間になれ。必要とされたら全力で働け、尽くせ。そうやって自分の価値を上げていくんだ。いいな？」

確かに奮い立たされた。この上昇気流に乗って飛べば、自分は素晴らしい社会人になれる。そう思った。

千晴の教育係になったのは、佐々木という三十代の女性社員だった。常に早歩きでオフィスや街を闊歩し、千晴が数秒目を離した隙にクライアントに電話してアポを取りつけているような忙しない人だった。そんなところが、叔母の洋子にちょっと似ていて、格好よく映った。

彼女の仕事ぶりを真似ているうちに、佐々木本人から「未谷さんは気が利くから、何でも先回りで動いてくれて本当に助かる」と頼りにされるようになった。それがどれだけ嬉しかったか、今でもよく覚えている。

佐々木が突然結婚して退職することになったのが、その半年後だった。

「そろそろ潮時だと思ってたんだよね」

そう言って彼女は会社を辞めた。「潮時」という言葉が、「三十六歳で独身の自

分」を指していたのか、「十四年も激務をこなした自分」を指していたのか、千晴は未だにわからない。

部下の寿退社を知らされた竹原は、「だから女は嫌なんだよ」と佐々木のいないところで大きな溜め息をついた。直属の上司がいなくなった千晴を一旦預かることになったのが、その竹原だった。

「ヒツジぃ、お前は彼氏いんのか？　佐々木に続いて寿退社とか勘弁してくれよな」

彼は千晴のことをヒツジと呼んだ。親しみを込めたあだ名というより、「ひつじたに」という五文字を発するのが煩わしい、という理由からだった。

「いいか、女は結婚したらそれまでのキャリアがぶっ潰れるからな。子供なんて産んだらもうおしまいだ。男と付き合うなら覚悟して付き合えよ」

嫌味ったらしく笑った竹原に、自分はなんと答えたんだっけ。「いえいえ、私、彼氏なんていませんから」と、ヘラヘラしていたんだろう、きっと。

営業先への同行、スケジュール管理や書類作成、飲み会のセッティング、出張の手配、何だってやった。竹原の抱えていたプロジェクトが始動すれば、進行管理は千晴の仕事だった。休日の接待ゴルフにも駆り出された。

典型的な体育会系気質の竹原は、不思議と似たような性質のクライアントが多かった。飲み会ともなれば全員が大酒飲みと化し、千晴はお酌に追われて水すら口に

できなかった。家に帰るのはどんどん遅くなって、会社に泊まり込むことも多くなった。両親が帰宅した千晴に怪訝な顔をするようになったのは、この頃だ。

一時的に預かるだけのはずだったのに、千晴は竹原の専属秘書のような状態になって、それを部署の誰もが受け入れてしまったのも、多分この頃。

風邪を引いているような状態が数ヶ月続いたこともあった。熱っぽくて、喉と頭が常に痛くて、「顔色が悪い」と母に毎朝言われた。

「常にスケジュールと予算に追われるのが私達の仕事なんだよ」と佐々木は言っていたけれど、そこに竹原の機嫌が加わった。

「おい、ヒツジ」

そう呼ばれたら、竹原のところに飛んでいく習性が染みついた。どれだけ急ぎの仕事の最中だろうと、手に荷物を抱えていようと。

以前、クライアントとの電話中に竹原から呼ばれ、電話が終わってから駆けつけたら、手にしていた書類束で頭をはたかれた。ああ、この人の部下への接し方に合理性を求めてはいけないんだ、と思い知った。

それ以降、千晴を呼ぶたびに彼は「いーち、にー、さーん……」とカウントし、五秒たつと「ラム肉の方が役に立つな」と怒鳴るようになったのだった。

「酷いよな」

そう言う同期もいた。でも、誰もその場で声を上げはしない。「酷いよな」と言った口で「でもあの人、ヒツジさんに怒鳴らないと収まらないし」と溜め息をつく。「無理しちゃ駄目だよ」と千晴の肩を叩いた手で、「ヒツジさん、企画書作るの得意でしょ。これ手伝ってくれない？」とちゃっかり仕事を押しつける。

本気で心配して、どうにかしようと思っている人なんて、誰もいなかったのだ。

ヒツジというあだ名は、最初こそ親しみを込めて呼んでもらえているようで嬉しかったけれど――いつの間にか、自分が本当に家畜になった気がした。

あの日もそうだった。

「おい、ヒツジ、企画書まだか」

「はい、今すぐ！」

返事をし、企画書を掴んで立ち上がった途端、平らなはずの床が急な登り坂に感じた。次第に足下はぐにゃりと歪み、泥の上を歩いているようで、足が絡まって、千晴は床に倒れ込んだ。誰かのゴミ箱をひっくり返し、誰かのデスクの角に額をぶつけた。

顔を上げたら、床に赤い点が一つ落ちていた。血だった。鼻血かと思って鼻の下を拭って、血の出所が額だということに気づいた。

「ヒツジ、早くしてくれるー？」

竹原の声がした。「くれるー？」と語尾を捻じ上げる言い方は、不機嫌な証拠だ。
額を手で押さえて、歩いていった。足下がおぼつかない。登り坂なのか下り坂なのか、前に進んでいるのか後退しているのか、わからない。
「何やってんだ、お前」
竹原はそう言って、千晴が徹夜して作った企画書を受け取り、一瞥して「話にならない」と突き返してきた。
ぐるん、と視界が反転して、千晴はそのまま床に仰向けに倒れ込んだ。硬く冷たい床からは、遠くを歩く誰かの足音がガンガンと響いてきた。
竹原の声がする。千晴を心配する声ではなかった。おい、こんなことで俺の時間を使わせるな。そう言いたげな声色だった。

――おい、ヒツジ！

頭の中を埋めつくした声に、ハッと目が覚めた。
「はいぃいいっ、ただいまっ！」
眠気が吹っ飛んで、ベッドから飛び起きた。直後、サイドボードに置いてあった目覚まし時計がけたたましく鳴り始める。

夢だ。全部、夢だった。大きく息をつき、掌を叩きつけるようにして目覚まし時計を止める。残響が、部屋の隅にこびりついて消えない。

頭を抱えて、うな垂れた。あと一秒、悪夢が長かったら、子供みたいに泣きじゃくっていたと思う。

◇　◇　◇

「未谷さんは学生時代にどうして広告業界を志望したんですか」

狭い部屋に響いた低い声に、千晴は鼻から息を吸って、ゆっくり吐き出した。

「広告業界の役目は、広告を通してさまざまな商品やサービスのよさを伝え、多くの人の生活を豊かにするものだと思います。その点に魅力を感じて広告業界を志望しました」

確かに、面接ではそう話した。およそ四年前、リクルートスーツに身を包んだ未谷千晴は、一之宮企画の人事部員の前で、そう志望動機を語った。

「一之宮企画を希望したのはどうしてですか」

「業界最大手でもあり、取引先の種類も数も膨大です。さまざまな業界の、さまざまな商品のよさを発信する仕事ができると思いました。営業企画部はその中でも業

務の要となる部署で、学生時代からゼミや課外活動の取りまとめをすることが多かったので、そういった経験や得意分野を活かせると思ったからです」

本当にそうだったのだろうか。学生時代、「絶対に広告業界に行きたい」と思っていたわけじゃない。現に他の業界だってたくさん受けた。内定をもらった会社のうち、一之宮企画が一番大きな会社だったから、内定承諾書（しょうだくしょ）にサインした。

「ジーヴスでの業務は、我が社の商品のよさを広くＰＲすることです。一之宮企画のようにさまざまな商品やサービスの広告を作ることはできません。それでもよろしいですか？」

「はい、もちろんです。母がアパレルの販売員をしていたこともあって、ジーヴスの名前は子供の頃から親しみがありますし、ここ数年精力的に展開されている若者向けブランドの服は、私もよく購入しています。若者向けのブランディング戦略は一之宮企画時代にも携わったので、必ずお役に立てると思います」

大企業に行きたかったの？　違う。半分、違う。確かに、一之宮企画はみんながすごいね」と言ってくれる大きな会社だった。

「でもそれ以上に、多分、きっと、誰かに必要とされたかった。

うちの会社には君が必要なんだと、誰かに言ってほしかった。だから頑張って就活した。大企業から内定をもらえたら、それだけ自分が必要とされている人間のよ

うに思えた。自分という人間に、誰かが保証書をつけてくれたみたいだった。
「面接は以上です。結果はシェパード・キャリアさんを通してお伝えします」
面接官の素っ気ない言葉に、千晴は深々と頭を下げた。目の前のテーブルに、自分の顔がぼんやり映り込む。
端っこに、持ち手が天然石のように妖しく光る杖が立てかけられている。
「はい、ありがとうございます」
立ち上がって、最後にもう一度深く礼をして、千晴は退出した。廊下に出た途端に溜め息をついてしまい、その場に立ち尽くした。
「……必要じゃなかったんだよ」
前職で、自分は必要とされているんだと思っていた。必要とされているからこんなに忙しいんだ。必要だから、期待されているから、上司はこんなに厳しいんだ。必要とされていない人間には、楽しいことも辛いことも降りかからない。
たった今出てきた部屋から、「どうぞ」と声がした。千晴は再びドアを開けた。
「就活生だったらあれで百点なんですけどね」
ドアを閉めきらないうちに、来栖が嫌味っぽく言ってくる。どうやら、模擬面接はイマイチな出来だったようだ。千晴自身あまり手応えを感じなかったのだから、無理もない。

「まず、具体性がない。社会人経験のない学生ならともかく、中途採用の面接では前職での実績を如何にアピールするかが勝負です。前職での仕事内容はもっと突っ込んで話した方が、相手も聞き甲斐があると思いますよ」

あんたの受け答えはつまらないんだよ、と暗に言われ、千晴は肩を落とした。面談ブースと違い、模擬面接用の小部屋は窓もなく息苦しい。

「すみません、笑顔で話す自信がなかったので」

高校生に人気のアイドルを起用して作った、スナック菓子のテレビＣＭ――芸能事務所や映像制作会社のスケジュール調整に手こずっていたら、竹原に「フィックスするまで帰るな」と言われた。あのときはちょうど、第一営業企画部恒例の夏のバーベキュー大会の準備も任されていて、結局三日ほど家に帰れなかった。

ロングセラーのスポーツドリンクを若者向けにリニューアルしたプロジェクト――パッケージデザインの完成後に飲料メーカーが突然「これではダメだ」とリテイクを出し、担当した有名デザイナーがヘソを曲げた。竹原に「土下座でもなんでもして修正させろ」と背中を小突かれてオフィスを追い出された。

スーツメーカーとコスメブランドがコラボした女子大生向けの就活イベント――当初コラボを予定していたスーツメーカーがイベントに後ろ向きで、「別のメーカーにした方がいいかもしれない」と竹原に進言したら、「大学はその会社が来るな

らやるって言ってんだからなんとかしろ」と怒鳴られた。結局、同等の知名度を誇るメーカーを提案したら事態はころっと動いた。

「確かに私が携わった仕事ですし、私が進行管理をしました」

自分の実績と言おうと思えば、言える。でも、「これが私の前職の成果です」と胸を張ることが、どうしてもできなかった。

あんなに頑張ったのに。ベッドでゆっくり寝ることも、同僚と息抜きに飲みに行くのも我慢して、怒鳴られるのも我慢して、頑張ったはずなのに。

「ただ、その過程で本当にいろいろなことがあって、私は、私の仕事を誇ることができません」

おかしい。一之宮企画から内定が出たとき、私はもっと輝かしい社会人生活を思い描いたはずだ。

言いづらいことを精一杯言ったつもりなのに、来栖の反応は薄かった。「そうですか」と短く切り捨て、傍(かたわ)らに三脚で立ててあったスマホに手を伸ばす。面接中の千晴の受け答えを録画していたのだ。

「自分の仕事を誇ることができません、ですか」

呆れた様子で、来栖がスマホの画面を千晴に見せてくる。

「まさにそんな顔をしてましたよ、未谷さん」

画面の中の千晴は、一之宮企画で働いていたときのように、誰かに気に入られようと、役に立つ人間だと思ってもらおうと、必要とされようと、必死だった。

ところどころ言い淀んで、苦しそうに口から息を吸う。まるで泥の中を泳いでいるようで、堪らず顔を背けてしまった。

「未谷さん、最初の面談のときに、『高望みはしない、どんな業界でもどんな会社でもいいから働きたい』と言いましたね。それはあなたの本心ですか」

特別やりたいことがあるわけでも、誰にも負けない特技があるわけでもない。「あんたは器用貧乏なところがあるからねえ」と、幼い頃から母に苦笑いされてきた。

学校の成績はよかったけれど、そんなものは社会に出たらたいして役に立たないと気づくくらいには、ものわかりだってよかった。

だから、せめて、必要とされたかった。

「本心です。私は、私を必要としてくれるところで働きたいです」

――ヒツジさんは、俺等の中で一番仕事できるからさ。だから竹原部長も、お前のこと頼りにして、期待してるんだよ。

同期のそんな言葉を心の片隅でよりどころにしていたし、機嫌のいい竹原がごく希に「新人はまだまだ使い物にならないけど、お前はその中でもちょっとはマシだな」と口にするのを、嬉しいと思っていた。

でも、千晴が昨年末に会社で倒れたとき――病院で過労と診断され、一週間ほど入院したとき、竹原は一度も見舞いに来なかった。それどころか、立て続けにメールで進行中のプロジェクトの状況を問い合わせてきた。普段の高圧的な態度が嘘みたいに、事務的な文面だった。

ああ、そうか。全然、必要じゃなかったんだ。都合よく動いてくれて、都合よく八つ当たりしたり偉ぶったりできる人間にすぎなかったんだ。

そう気づいたら、退院後、家から出られなくなった。そのまま年を越し、お正月休みが明けても出社できず、退職願を書いた。

膝に置いた両手をぼんやり眺めていた。そんな千晴のつむじに笑い声が当たる。千晴を馬鹿にするような、哀れむような、乾いた笑い声。

この人、この流れで、笑うの？

「必要とされる場所で働きたいんですか？　そうやって、自分の価値を他人の価値観に委ねるから、ブラック企業で扱き使われて壊れたら捨てられるんですよ。自分の価値くらい、自分の価値観で測ったらどうです？」

来栖は笑い続けていた。口角を上げて、肩を揺らして、笑っている。この人がこんなに笑うのを初めて見た。魔王は笑っていてもどこか偉そうで、笑いながら千晴を品定めしているみたいだった。

「要するに、あなたはジーヴスで働きたいわけじゃない。僕が紹介した求人の中で、一番大きな会社で、条件がよかったから。僕が『未谷さんの経歴は先方にとって魅力的だ』って言ったから。あとは、ご両親や叔母さんが『いい会社に決まったね、よくやったね』と言ってくれそうだから。書類選考を難なく通過したから。だから行きたい。そうでしょう？」

そうだ。その通りだ。

「転職先がブラックかどうかなんて関係ないですよ。今のあなたはどこに行ったって、遅かれ早かれ前と同じ目に遭います。誰かから必要とされれば未谷さんは家畜のように従順に働き、その人が与えてくれる価値観を丸呑みにして、壊れるまで働きます。運よく壊れないで定年を迎えられたら幸せじゃないですかね」

血の気が引くような恐ろしいことを、魔王は笑いながら語った。お前は一生このまま。どこへ行ってもこのまま。楽しそうに繰り返した。

私はずっとずっと、こんな自分で仕事を続けるんだろうか。誰かに必要とされるために、失望されないように、誰かのために走り回るんだろうか。

「未谷さん、あなたは、どうしてそんな人になっちゃったんですか？」

「そんなの、こっちが聞きたいですよ」

口の中で火花が散るような、不思議な感覚がした。

「別に、特別な特技があったわけでも、他の人とは違う特殊な経験をしてきたわけでもないです。親がとても厳しかったとか、学生時代とても嫌な目に遭ったとか、そんなんじゃないんです。普通に生きてきて、普通に社会人になりたかっただけなんです。なのに、なれなかったんです」

思えば、自分の未来が明るいと思えていたのは、一体いつまでだっただろう。一之宮企画から内定が出たときは、走りたくなるのを堪えながら、足取り軽く帰宅したのをよく覚えている。背中から羽が生えたみたいに、気分が高揚していた。

社会人になって、羽が一枚一枚もがれていって、それでも飛んでいるふりをしていたら、いつの間にか墜落した。周りの人間が普通に上っている階段から転がり落ちて振り出しに――いや、もっともっと下の方まで沈んでしまった。

「あなたの人生、それでいいんですか？」

テーブルに頬杖をついた来栖が、千晴を見る。視線が一ミリとて揺るがない。どこか青みを帯びた黒目が、千晴を捉えて放さない。

ぽたり、と左手に何かが落ちた。小さな雫が一滴、手の甲に沿って流れていく。涙はそれ以上続かない。一滴だけ。一滴だけだった。

「……あの」

頬についた涙のあとを指先で擦りながら、千晴はやっとのことで声を上げた。掠

れ声はまるで子犬が飼い主を呼ぶようだった。
「私は、どうすればいいんでしょうか」
聞く相手を間違っている、と思った。父とか、母とか、洋子とか、悩みを打ち明ける相手はいくらでもいるのに、どうしてこの人なんだ。こんな、泣いている女性を前にして眉一つ動かさない男なんだ。
「そんなこと自分で決めてください。大人なんですから」
ほら、こんな人情の欠片もないことを言う。
「……そうですよね」
でも、悔しいけれど、彼の言う通りだった。自分で決めなければ、価値観の依存先がこの転職の魔王様に置き換わるだけだ。
「すみません」
ずずっと洟を啜って、千晴は深呼吸をした。ゆっくりと息を整えると、喉の奥の震えが収まっていった。
「どんな会社でどんな仕事がしたいのか、私には自分の人生のビジョンがありません。こんな状態で面接を受けるのは誠意に欠けると思うので、ジーヴス・デザインの選考は、辞退させてください」
腹の底に力を入れて、なんとか言いきった。来栖はすぐに「わかりました」と

頷(うなず)く。仕事は片付いた、という顔で、杖を手に立ち上がった。
「長丁場(ながちょうば)になるかもしれませんが、未谷さんが今後どうなりたいのか、そのビジョンが見えたら、僕がそれに合致する企業を紹介しますし、必ず内定させます。精々(せいぜい)頑張ってください」
果たして、彼は励まそうとしているのだろうか。それなら、どうしてもっと言葉を選べないんだろう。

◇　◇　◇

「選考辞退しちゃって、姉さん達、怒ってないの？」
台所から土鍋を持ってやって来た洋子は、言葉の割に笑顔だった。ローテーブルの上に置いたＩＨコンロに鍋をセットし、電源を入れる。
「そうなんだよぉ……」
大きなビーズクッションに深く座り込んで、千晴は天井を仰いだ。視界の隅に、ブラウンの立派なキャットタワーと、千晴を見下ろす一匹の白猫が映る。
「休職してから、心配はされても怒られることはなかったのに、久々に面と向かってお説教された」

当然だ。感触のよかった大手アパレルメーカーの選考を辞退してしまったのだから。その上、転職活動は一度休もうと思う、なんて宣言されたら、親としては怒りたくもなる。昨日もそれで母と言い合いになってしまい、事情を察した洋子が夕食に誘ってくれた。

春キャベツと豚肉の薄切りをミルフィーユのように幾層にも重ねた鍋から、次第にぐつぐつと音が聞こえ始める。食べ物の匂いを察知して、白猫がキャットタワーから舞い降りた。

「タピオカ、あんたは自分のカリカリがあるでしょう」

洋子が声をかけると、猫はものわかりよくキャットタワーに戻っていった。

洋子はこの２ＬＤＫのマンションで、タピオカという白猫と一緒に暮らしている。昼間一匹にしておくのは可哀想だからと、毎朝タピオカを連れて出勤するくらいだ。シェパード・キャリアではコーポレートキャットとして活躍しているらしい。耳から尻尾の先まで、凛とした雰囲気をまとった美人なメス猫だ。

「タピオカ、相変わらずものわかりいいね。拾ったの私なのに、あんまり懐いてくれないけど」

「クールな性格だからね、この子」

タピオカを拾ったのは大学三年の頃だ。キャンパスの隅っこに子猫が五匹捨てら

れているのを見つけた。タピオカだけもらい手が見つからず困っていたら、洋子が引き取ってくれることになった。白い毛と色素の薄い目がココナッツミルクに浮かぶタピオカみたいだと思って、千晴がタピオカと名付けた。

「そろそろ食べていいかな。キャベツが柔らかくて美味しそう」

洋子がキャベツと豚肉を小皿によそい、千晴の前に置く。黄金色に透き通るスープから、醤油と鰹出汁のいい香りがした。

「はい、ビール飲む。ご飯食べる。これで大抵の悩みは一時的に吹き飛ぶ」

差し出された缶ビールを開け、乾杯して、思いきって半分ほど飲んだ。荒々しい喉ごしは、喉元に滞留していた何かを根こそぎ洗い流してくれるみたいだった。

「悩みをビールで一瞬忘れたところで、千晴、これからどうするの？」

本当に一瞬しか忘れさせてもらえなかった。もしかして、母から洋子に「千晴に何かアドバイスしてあげて」と根回しでもあったのだろうか。

「とりあえず、バイトでもしようかな。大学のとき、塾講師のバイトしかしてなかったし。やったことないタイプの仕事、やってみようかなと思って」

あの塾講師のバイトだって、高校生の頃に通っていた塾の先生に「人手が足りないからやってくれない？」と頼まれたのが始めたきっかけだった。求められるまま、いつの間にかシフトの取りまとめや、新人の指導係まで担っていた。

「頼り甲斐があったわけじゃなくて、断らないからちょうどよかったんだよね」
千晴が突然話し出しても、洋子は何も言わなかった。キャベツと豚肉を咀嚼し、ビールを飲み、ときどきタピオカに視線をやる。
「頼られたり必要とされたりすることに一生懸命に応えて、自分のことなんて考えないで生きてきちゃったんだ。もう大人なんだし、そのへんのこと、自分でちゃんと考えないとね」
「あはは。だいぶ来栖の言動に影響された感じだ」
「そんなこと自分で決めてください」と言い放った彼を思い出して、千晴は唸り声を上げた。そのまま、渋々首を縦に振る。
「千晴がジーヴスを辞退するって決めた日の夜、来栖が直々に謝ってきたよ。姪っ子さんが大手企業に再就職するチャンスをみすみす逃すのを手助けしました、って」
あー、もう、どうして、そんな言い方しかできないんだ。チャンスを逃したのは重々承知している。それでも、手放した方が幸せになれると信じたのに。
「でも、『あの子の人生はもう少しマシなものになりますよ』だってさ」
洋子を前にした来栖が、口角を緩やかに上げるのが目に浮かぶ。千晴を哀れむような、取って付けたような薄い笑みだ。
渋い顔をする姪っ子がそんなに面白いのか、けらけらと笑いながら洋子は二本目

の缶ビールを開けた。
「ねえ千晴！　叔母さん、いいこと考えたんだけど」
ビーズクッションを枕代わりにうたた寝を始めた洋子が突然叫んだのは、千晴が台所で土鍋を洗っているときだった。

◇　◇　◇

就活生が闊歩していた街は、四月に入ると新入社員達の姿が目立つようになった。
果たして私は、何に見えるのだろう。新宿駅で下車し、都庁方面に向かって歩きながら千晴は思った。街路樹の植えられた広い歩道を歩く人々の姿は、年齢も雰囲気もさまざまだ。ゆったり歩く人もいれば、忙しなく早歩きで行く人もいる。笑顔の人もいれば、険(けわ)しい顔の人、無表情の人、音楽を聴いている人、アイスコーヒーを飲みながら歩く人……いろんな人がいる。
前方の歩行者用の信号が点滅し始め、千晴の側にいた人が走り出した。釣られて、千晴も走った。横断歩道の白線が春の日差しを反射して眩(まぶ)しい。
目的のビルの前に立ち、千晴は自分の頬を両手でぐにぐにと揉(も)んで、口元を持ち上げた。ガラス張りのビルに空の色が映り込んでいる。その背後に真っ青な空が広

がっている。雲もほんのり青く染まっている。

「よし、よーし、よし」

自分に向かって何度も何度も頷いて、千晴は再び歩き出した。ビルに足を踏み入れる。天井の高いエントランスホール。エレベーターの一つがちょうど一階に下りてきた。エレベーター内の鏡には、グレーのスーツを着た自分。ちょっと猫背になっていて、慌てて背筋を伸ばした。

十二階に到着する。明るいエントランスに、「シェパード・キャリア」という木製の看板が掲げられている。羊飼いが使うフックをあしらったロゴマークが、春の白っぽい日差しに照らされていた。

ドアを開け、奥のオフィスへ向かう。おろしたてのスーツのような香りが強くなっていく。働く人の熱気が近づいてくる。

自然と、足が重たくなる。それでも足を前に出す。そうすれば体は進んでいく。

「お、おはようございます！」

第一声を噛んでしまったことを後悔（こうかい）しながら、千晴はオフィスに向かって一礼した。洋子の声がした。「今日から一緒に働くうちの可愛い姪っ子でーす！」と、千晴を指さす。控え目な拍手が聞こえてきて、千晴はゆっくり顔を上げた。

「今日からお世話になります。未谷千晴です。よろしくお願いします！」

シェパード・キャリア。ここ、西新宿に本社があり、大阪と福岡にも支社がある。全従業員数は六十人。二十年以上の歴史がある転職エージェント。業務内容は、仕事を求める人に最適な求人を紹介し、就職をサポートすること。

千晴は、今日からこの会社の見習いＣＡになる。「バイトをするくらいなら」と、洋子の発案で働くことになった。

試用期間は一年。完全なるコネ入社だ。

ここで働きながら、自分の今後を考えてみたら。洋子にはそう言われた。

大きな窓のおかげでオフィスは明るかった。面談ブースと同じ、青色を基調とした清潔感のある空間で、社員達がこちらに向かって拍手をしている。

唯一（ゆいいつ）、拍手をしない人がいた。窓に背を預けるようにして立つその人の手には、木製の杖がある。

杖がゆるりと動き、千晴に歩み寄ってくる。千晴の目の前に立った彼は、初めて会ったときと同じ顔をしていた。

こんな自分が、ここで働いていいのだろうか。洋子の提案から入社までの数週間、ずっと考えていた。自分探しのためにとりあえず働くなんて、どう考えたって不誠実だし、コネ入社だし、他の社員からはいい目では見られないはずだ。

でも、この人だけは、不敵（ふてき）に笑いながら「精々頑張ってください」と言うのだろ

うと思った。

「早々に仕事が見つかってよかったね」

転職の魔王様の異名を持つ男は、例に漏れず淡々とした声色で投げかけてきた。懐から取り出したネームホルダーを、無言で千晴に差し出す。見覚えのあるデザインの社員証には、千晴の名前と顔写真が印刷されていた。

「シェパード・キャリアへようこそ。自分探しとやら、精々頑張って」

それだけ言って、もといた場所に戻っていく。わかってはいたが、それでも「精々」は余計だろ。肩を竦めそうになったとき、おもむろに来栖嵐は振り返った。

「そうそう。未谷さんの教育係、俺だから」

今日の天気の話でもするみたいに軽やかに、淡々と言い放つ。「え？」と声を上げた千晴に対し、来栖が肩を揺らした。どうやら笑ったようだ。どんな顔で笑ったのかは、窓から差す春の日差しが逆光になってよく見えなかった。

太陽に照らされた彼の髪が、白く光っていた。